

INTERVIEW

自治医科大学 副学長
大槻マミ太郎 先生



グローバルな思考で、 地域医療を実践しよう!

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

自治医大との縁

山田隆司(聞き手) 今日自治医科大学副学長の大槻マミ太郎先生のお話を伺う機会に恵まれました。先生は今、副学長であり、また皮膚科学講座の主任教授を務めていらっしゃいますが、先生がそもそも自治医大に着任された背景、また先生のご専門の皮膚科診療のことも含めて教えていただきたいと思います。またコロナ禍の状況で、自治医大の学生は講義や寮生活などいろいろな面で支障が生じていると思いますし、それ以上に先生方は大変なご苦勞をされていると推察されます。そのような状況を卒業生にも広く伝えられればと思います。残念ながら緊急事態宣言中なのでリモートでのインタビューとなりましたが、よろしくお願ひします。

まずは先生が自治医大に着任された背景をご紹介いただけますか。

大槻マミ太郎 私が自治医大に赴任したのは1998年です。当時私が在籍していた東京大学の主任教授から都内の病院の部長の話があったのとほぼ同時に、専門外来で師事していた中川秀己先生が自治医大教授に赴任され、その下で働かないかというお誘いが重なり、どちらに決めるか妻に相談しました。実父が自治医大名誉教授(英語)の鈴木伝次先生と懇意にしており、鈴木先生のご仲介で結婚した経緯があるのですが、実は妻の父親は森岡恭彦先生なのですね。宇都宮で中高を過ごした妻は、栃木県への親近感がなお残っており、二つ返事でOKということで、このご縁

を大切に思っ、て自治医大へ来ることにしました。森岡先生は自治医大開学時の外科学教授でしたので、1期生はじめ卒業生にとっても慕われていますし、私としては実の父親に対するのと変わらぬ愛着、そしてリスペクトがありますので、森岡先生の導きで今の私があるのだらうと感じています。

山田 そうなのですか。われわれ1桁世代の卒業生にとっては森岡先生や高久史磨先生は恩師として双壁のようなもので、お世話になった卒業生も多く、われわれにとっても親のような存在です。先生がそういうご縁があったのは、初めて知りました。

そのようなご縁で自治医大に来ていただいたということですが、自治医大は卒業後に一定の義務があり、他の大学の学生とはまた異なるところがあると思います。赴任されてから学生との関わりはどのような感じでしたか。

大槻 他界した私の父も大学のつわもの教育者でしたが、教育が好きで山岳部と軽音楽部の顧問をしていました。私の小さいころの記憶では、自宅にいつも学生が転がりこんで来ていました。そういう父でしたので、多分私もその血を引いていてやはり学生が好きです。自治医大に関しては森岡先生が先鞭をつけてくれたということもあり、いろいろな先生に昔の話を聞くことができました。東大から赴任した先生は多いはずですが、私のようにすぐに自治医大に馴染めた人はまれだらうと思います。

山田 私が学生の頃には、教授たちがまだ若かったせいもあるかもしれませんが、教授然とした感じではなく、気軽に教授室を訪れたり、自宅で食事をご馳走になったりといったことが珍しくありませんでした。当時は一緒に集団生活をしていたような感じで親しみがありました。そういう意味では最近では先生方と学生の関係が薄れてきたのかなと思っていましたので、先生の今のお話はとても嬉しいですね。

大槻 私は自治医大に赴任して1年目にピアノ同好会の顧問に就任し、それから20年以上顧問を続けていますが、ピアノ同好会の顧問になってから、特に学生たちとの親交が深まっていきました。今でもコロナ禍になるまでは、院内で患者さん向けのコンサートを年4回開催してきました。山田先生はご存じだと思いますが、その昔附属病院の地下にアート・イン・ホスピタルという、アート感あふれるうどん屋さんがあったのです。大学書房の金田前社長がつくられたのですが、そこには骨董品のなべゼンドルファーのピアノが置かれていました。お店の鍵を借りて深夜にピアノの練習をしていると「夜中に地下からピアノの音が聴こえる」と当直医に怖がられたりして、オペラ座の怪人のようでした(笑)。アート・イン・ホスピタルは残念ながら閉店してしまいましたが。

山田 大学書房の金田社長にはわれわれも物心両面で(笑)、お世話になりました。

広くて深い皮膚科学

山田 先生のご専門である皮膚科診療についても少し教えていただけますか。

大槻 皮膚科学というのは、その中に内科も外科も、

そして病理学も生化学も免疫学もあり、皮膚科の門を開けたら、それはもうバラエティ豊かで別次元の医学が広がっていて、皮膚という薄っ